

死刑制度 井戸端会議

とかく重くなりがちな「死刑」について、7チャ7チャと言ったり、聞いたり。出入り自由なカフェ型で開催しています。

日時：本日（11日）17：30～

次回：8月8日（土）

場所：足立区勤労福祉会館

TEL：03-3838-3581

揺れる犯罪心理

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会

東京都荒川区南千住一―五九六―三〇二

<https://sobanokai.hanamizake.com/>

今年三月二三日の事件で記憶に新しいと思うが「京都府南丹市小五殺人事件」があった。テレビでも新聞でも毎日盛んに報道された。SNSでも犯人探し等々、興味深く語られたらしい。

父親（安達優季容疑者）が四月一六日逮捕され五月二八日殺人遺体遺棄容疑として再逮捕され起訴された。安達優季容疑者は取り調べに対し「本当の父親じゃないのに…、と言われ怒りで」と言っているとの報道。「うまく関係を築けなかった…」とも。そういう述べを聞いて「うーん、ありそうなこと」「分かる気がする」と思った人も多いんじゃないだろうか。父親の気持としても、子どもの気持としても。離婚連れ子再婚はよくあることで、事件の母親の気持は計り知れない…。

身近な知人が小学生の娘を連れて再婚後に、新しく生まれた弟の父親に対し「自分の子はいないでしょ」と言ったという話をその母親である知人から聞いたことがある。うーん…と、何とも言えなかった。複雑な言葉だ。しかしその子の率直な言葉だろう。心の広かった父親とその子どもの成長で今は円満に無事に生活している。安達優季容疑者も幼少期に母親から祖母に預けられ、母親は直ぐに姿を消してしまったが、足の悪い祖母の面倒をみる優しい子だったらしい。五歳年

虐殺のスイッチ



人は加害者にも被害者にもなり得る。絶対ない、などと誰にも言えない。過ちを犯してしまった人に対して寛大でありたい。「人はなぜ優しく善良なままで人を殺すのか」その人が深く反省し改めて生き続けたいと願うならば被害者、ご遺族の方々も応報感情を抑え加害者に許しを与えてほしい。共に他者を考えながら生きる社会でありたい。（下）